■音感を養ふのは幼児期に

東京芸術大学のヴァイオリソ科を卒業された森瑶子さんが、音楽家の道を歩む事を断念して作家に転向されたのは、「小学生になってからヴァイオリソを始めた為に、絶対音感が身に着いてゐない」事を覚ったからであると聞いてゐます。絶対音感は幼児期だと容易に身に着くけれども、幼児期を過ぎると途端に難しくなり、終(つい)にはどんなに努力しても身に着かなくなると言はれます。

音感といふものは「3歳児は4歳児の半分の学習で身に着くが、5歳児は4歳児の2倍もの時間を掛けないと身に着かない」ものであることは先にも述べました通りですから、芸大に進んでから気が付いたのではもうどうにもならないのです。

音楽家になるならぬは幼児期には決められない事なので、幼児期の間に親は我が子に絶対音感を身に着けさせて置く配慮をして欲しいと思ひます。さうで無いと、森瑶子さんのやうな目に遭(あ)ふからです。転向しても森さんのやうに別の道で成功すれば良いが、それは万に1つ有るかどうかの難事でせう。それに、音楽家にならなくても音感が身に着いてゐては困るといふ事は無いのですから、着けさせて置いてやるべきだと思ひます。

音感教育も親がするのに越した事は無いですが、それが出来る親は少ないと思はれますので、誰にも出来る事を述べませう。

まづ1つには、音程が正確に調律されてゐる楽器を使って遊ばせて置くだけでも、結構音感が身に着くものだといふ事です。幼児だからと言ってよく安物の楽器を与へる親が多いですが、これはとんでもない事で、幼児だからこそ本格的な立派な楽器を与へる事が大切なのです。然し、いくら高価なピアノだと言っても、度々調律師に看て貰ふ事を怠ったら何にもなりません。

これも前に述べましたが、“耳”は幼児期にいろいろな音や声を聴く事に因って“聴力”が育って行く」ものですから、幼児期に優れた音楽を聴いて育った子供は、優れた音楽によく反応し、又よくこれを聴き分ける能力が自然と身に着くもののやうであります。その好い例を、もう20年も昔の事ですが、当時ソニーの社長だった井深大氏から聞いた事があります。

確か森ビルの森社長とそのお嬢さんだったと記憶してゐますが、お嬢さんは、愛育病院で出産され、その後も都合があってそのまま1年程病院で保育されたといふお嬢さんであります。森氏は暇の折には家でよくピアノを弾かれたさうですが、ベートーヴェンの「エリーゼの為に」を弾いてゐる時に限って、いつとも無く、どこからとも無くお嬢さんが現れて、傍でそれをうっとりとした表情で聴いてゐる、といふのです。

そこで「この曲が好き？」と尋ねると「この曲を聴いてゐると、何だか判らないけれどもとても好い気持になる」といふ返事です。